

優秀賞

『ドゥイノの悲歌』

リルケ 作；手塚富雄 訳、岩波書店、1957.

井口 元太（文学部 臨床心理学科 3年）

リルケは、オーストリアの詩人だ。オーストラリアと聞けばコアラが思い浮かぶけれど、オーストリアと聞いても何だか判然としない。けれど、オーストリアには美しい詩を書く人がいる。それも、愛についての詩だ。彼が生きた時代は、第一次世界大戦と重なる。彼は戦争によって荒廃した街を見て、平野を見て、人を見て、様々な国を見て、それらを感じて詩を書いた。あるいは、彼が見ていたのは、彼自身かもしれない。この詩集は、十編にわたる悲歌で構成されている。第一の悲歌から始まり、第十の悲歌でこの詩集は完成を迎える。その中でも、僕が好きな節を引用したい。

第一の悲歌の中で、助けを求める言葉に続く節だ。天使にも、人間にも、誰にも助けを頼めない。そんな時に僕たちは、いったい何を頼りにすれば良いのだろうか。リルケはこう答える。

「わたしたちが日ごと何気なく見ているような、丘のなぞえのひともとの樹、昨日あるいたあの道、または犬のように馴れついて離れぬ何かの癖、これならわたしたちのもとに居ついて満足している。」 第一章より

リルケは、僕たちが何者も頼れなくなった時、そこには私たちがいる世界があることを伝えている。世界がどれだけ美しくても、誰かに愛を求めてしまう。そんな僕たちの心は、不安定で、海辺の貝殻のようにもろく、ひと足で踏みつぶされてしまう。何とか抜け出せばいいけれど、僕たちは、そんなことができるほど強くない。だから、リルケの詩を読んでほしい。

悲歌というと、何だか手に取りにくい印象を受けるかもしれない。しかし、この悲歌は愛の詩であることを忘れないでほしい。人は愛を知った時、同時に寂しさも知る。僕たちは、誰かから愛を受け取ると、それが失われる寂しさを思う。リルケの詩は、響くような美しさと、断崖に立つ城のような孤独によって出来ている。だから、愛の失われる寂しさを知っている貴方にこそ、この本を手にとってほしい。なぜなら、愛を知った時のあの高らかな喜びと、生きていることの寂しさで心が溢れてしまう僕たちを、この詩たちは強く抱きしめてくれる。そして、思い出させてくれる。愛は求めるものではなく、僕たちの心に降り落ちるものだということを。

ドゥイノの悲歌は、第十の悲歌で完成を迎える。

「そしてわれわれ、昇る幸福に思いをはせるものたちは、ほとんど驚愕にちかい感動をおぼえるであろう、振りくだる幸福のあることを知るときに。」 第十章より